独立行政法人 国立病院機構
四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

元看護部長さんからいただいたドングリのお人形

ニッチの中に小型カメラを仕込むEテレ取材スタッフ

2016年　1月号

―院内の小さな声から―

大好きな元看護部長Mさんから小さなドングリ人形を頂いたのは、Mさんの叙勲お祝いパーティーの席でした。常に医療の最前線で多くの患者さんに寄り添い、後ろに続く看護師を自ら身体をはって守ってきた方です。金屏風の前に和装で凛として立たれたMさんは、どこか違う世界の人のように眩しく見えました。そのMさんが突然私に向かって嬉しそうに小箱を差し出します。「見て！これ自分で作ったんよー！あの扉に入れて患者さんにプレゼントしてもらえる？」と懐かしいお茶目な笑顔。思わずいろんな想い出が蘇って胸がいっぱいになりました。大胆さと繊細さを併せ持つMさんのドングリ人形には和紙でできた花びらのような耳や、小さな帽子がちょこんとついていて、そのくせ、台になっている木片はのこぎりでばっさり切り落とされ、切り口に少しギザギザ感が残っています。そのことを指摘して久しぶりに二人で涙が出るほど笑いました。大切に持ち帰って台のギザギザをヤスリで少し丸くしてからプレゼントのニッチの中に忍ばせました。作品には作った人の全てがしみ込んでいます。

―Eテレ特集「病院にアートがあるということ」―

１月１２日、昨年９月より長期に渡り取材を受けていた当院でのホスピタルアートが特集番組として全国放送されました。番組はインタビュー形式で、院長をはじめ医師や看護師、検査技師、ボランティアメンバー、ホスピタルアートディレクターと、病院でのアート活動に様々な角度から関わっている人達の生の声を中心に編集されました。院内の映像と明るすぎず深刻すぎない程よい音楽が、ここが病院であることの深刻さを和らげてくれていました。小さな扉にギフトを忍ばせるプロジェクトの紹介では、あらかじめ扉の中に小さなカメラを仕込んでおいてギフトを見つけた子どもの表情を撮影したり、院内撮影ではカメラマンさんが車いすに座って撮影することで、周りの患者さんに不必要な緊張感を与えないように配慮したり、スムーズな撮影のためにあれこれと試行錯誤しましたが、そんな工夫が番組の中で美しい映像になって見事に活かされていて驚きました。当院のアートは患者さんや職員さんに近すぎず遠すぎない調度いい距離でいることを大切にしているのですが、取材に来られた3人のＥテレスタッフも、まさにそこを理解してくださり、病院の日常の流れに添ってごく自然な雰囲気で撮影してくれました。番組終了後、Ｅテレさんや当院にも多くの反響があり、「病院が生きていて呼吸をしているみたい。」「病院とは思えない」「私もこの病院に入院したい。」「内装と同じように職員さんの表情が優しい」などの声が多数寄せられました。全国各地から扉の中に忍ばせるギフトが届くようにもなりました。ボランティアや見学を希望する方も増え、改めてテレビの影響力の大きさを感じる機会となりました。今回特集を組んでくださったＥテレさんも含め、当院でのアート活動に共感し、協力してくださる仲間が増えることはとても嬉しく有り難いことです。後日ディレクターさんから連絡があり、番組がNHK局内で賞をいただいたとのことでした。病院の皆さんの協力のお陰だと感謝していらっしゃいました。お互いがお互いを理解しようと歩み寄り、対話から共に伝えようとすることをかたちにしてゆく手法は番組づくりもホスピタルアートも同じなのだと知りました。これからも医療者に寄り添い、スムーズな治療の一助となれるようなホスピタルアートの提案をしてゆきたいと思います。

作家名：高橋　文華